

映画「オッペンハイマー」

2024年のアカデミー賞で、作品賞・監督賞・主演男優賞・助演男優賞など7部門を獲得した「オッペンハイマー」を観てきた。

原爆の父と言われたオッペンハイマーと彼を取り巻く人間関係が中心にストーリーが展開され、米国という国のある意味での恐ろしさが強調され、核爆弾の悲惨さよりもそちらの方が印象に残ったのは、クリストファー・ノーラン監督の意向なのだろう。

この映画の中で登場する世界初の核実験である「トリニティ実験」は、1945年7月16日に米国南部ニューメキシコ州で行われ、そのおよそ1ヵ月後の1945年8月6日に人類史上初めて原子爆弾が広島に投下され、3日後には長崎県にも落とされた。70年以上たった今も苦し

消費量を減らすか、生産量を増やすか
エネルギー問題と温暖化を考える

ジャーナリスト

三木寛郎

み続けている人が大勢いることは忘れてはならない。こうして日本は世界で唯一の被爆国になったのだ。それ以降世界中で2050回以上の核実験が行われている。

1954年3月1日にビキニ環礁で行われた水爆実験の威力は広島に投下された原爆のおよそ1000倍もあり、爆心地から160kmほど離れた地点で操業していた日本のマグロ漁船『第5福竜丸』は「死の灰」を浴びて被爆し、大きな社会問題となった。

余談だが、フランス南西部のジロンド県にあるボルドー大学のフィリップ・ユベール氏の研究室では、放射線測定器を使って、ボルドー地方を代表する高級ワイン「シャトー・ラフィット・ロートシルト」のセカンドワイン「カリユアド・ド・ラフィット1905年」の鑑定が行われているという。これはワインに放

射性物質であるセシウム137が含まれているかどうかを調べるためである。ユベール氏曰く、セシウム137は論理的に自然界には存在しないといい、1945年に世界初の原子爆弾がニューメキシコ・広島・

長崎で使用された際に放出されたそう。つまりそれ以前に生産されたワインにはセシウム137は含まれていないと考えられているのだ。ワイン偽装詐欺の解明に核実験が一役買っているのは皮肉なことである。

憧れのアメリカ式

文化・生活

さてこの映画「オッペンハイマー」の舞台となった1940年代の米国は、戦時下とはいえ近代化が急速に進んだ時期であり、本土が戦禍を免れた戦後の米国は、冷戦体制を背景に驚異的な発展を遂げる。

テレビの普及とともに日本になだれ込んできた米国の姿は、家庭内でハイヒールを履いた主婦が、冷蔵庫や洗濯機に囲まれて「文化的」な生活をしている、そんな姿であった。

我が方は、窓を開け放ち、打ち水をし、蚊取り線香と蚊帳で夏をやり過ごし、炬燵と火鉢で冬の寒さをしのぐ日本人の日常の中に、ようやく普及し始めたテレビの画面から飛び込んで来たのは、米国の「文化的」生活であり、それは憧れの対象となった。

日本の高度経済成長が本格的に始まり、展開した1960年代末である1969年のデータを見ると、「三種の神器」と言われた電化製品の普及率は、白黒テレビ(92・7%)、洗濯機(90・8%)、冷蔵庫(89・3%)と9割ほどにまでなっている。

1970年代には3C(カー・クーラー・カラーテレビ)が登場する。

1969年の乗用車の保有率は21.3%、クーラー専用を含むエアコン(5.4%)、カラーテレビ(21.1%)であったが、1979年には乗用車の保有率55.6%、エアコン(40.6%)、カラーテレビ(98.4%)となっており、それに伴い日本人のエネルギー消費は飛躍的に増えている。

ちなみに東京⇄大阪間の鉄道の所要時間を見ると、1950年の特急「つばめ」が8時間、1958年にビジネス特急という触れ込みで登場した国鉄初の電車特急「こだま」が6時間50分、1964年には「東



憧れのアメリカ式「文化、生活

京オリンピック」開催に合わせて新幹線が登場し東京⇄新大阪間が4時間に、1992年には300系「のぞみ」が登場し2時間30分にまで短縮された。新幹線や家庭だけではない。ありとあらゆるものが電化され、自動化され、大量にエネルギーを消費するようになってきていることはいくらだらう。

不便さを享受する姿勢も



「ライトアップ」と称する大規模な夜間照明

当然といえば当然だが、とくに先進諸国の人類が享受している「便利な」暮らしは、大量のエネルギーを必要とするとは間違いない。その「便利な」暮らしを維持しながら、人類が抱えている大問題である「気候変動」に対処し、EV(電気自動車)を普及させようとしたり、製造・輸送・燃料、廃棄などの省エネ化を推進したり、リサイクルやリユースを進めたり、再生可能エネルギーや

自然エネルギーを活用しようとしたり、様々な取り組みが試行錯誤されているが、正直なところ芳しい成果が上がっているとは言い難い状況である。

「気候変動」は人類にとって死活問題であり、このままいけば人類滅亡の日は、どのような物差しで測るかにもよるが、いまや目前に迫っているとも言えるのだ。

いまある「便利さ」を維持し、享受し続ける前提で環境問題を捉えるのも一理あるが、そろそろその「便

利さ」を少し我慢して、人類が浪費するエネルギー自体を減らしていくような考え方も必要になってきているのではないだろうか。

自治体が声高に「節電」を謳いながら、その舌の根の乾かぬうちに「ライトアップ」と称して大規模な夜間照明で客寄せをしたり、「グランピング」と称して本来、天然自然と触れ合うことが目的なはずのキャンプをエネルギー大量消費型のレジャーにしてしまったり、どう考えても納得のいかない矛盾が満ち溢れているように思えてならない。

まして膨大なエネルギーを浪費し資源を無駄遣いする「戦争」を今さら遂行する先進国のリーダーなどと、考え方によっては気候変動に加担する人類の敵「大犯罪者」とも言える存在にさえ思えてくる。

ここはいったん立ち止まり、徒に増加するエネルギー消費に対応して発電量を増やすべく躍起になる前に、人の営みにおけるエネルギー消費量を減らしていく、言い換えれば少し「不便」な生活に戻るような考え方も必要になってきているのではないだろうか。